

ESRI 少子化問題セミナー

「少子化の真の背景と対応策を探る：子育て支援、次世代育成支援の方向」

(講演者：網野 武博 上智大学文学部社会福祉学科教授)

日時：平成 16 年 12 月 2 日 (木) 10:00~12:15

場所：共用第 4 特別会議室 (4 階 406 号室)

< 講演概要 >

- ・ 少子化の背景を心理学、社会学、福祉的な視点で、人と人との関わりの変化から見ていく。
- ・ 今日の日本人は、ぬくもりのある人間関係や人間を愛する心の豊かさを欠いているのではないか。そうしたことが異性との関わり方、子どもを産み育てることへの関心などに影響しているのではないか。

1. 少子化の背景への捉え方

1. 様々な背景の中で看過できないファクター

- ・ 人の場合、出生時の性比は、105 (男性：女性 = 105:100) と言われており、男性の方が多い。これは、人生の初期から新生児・乳児死亡率も男性の方が高いことにみられるように、生命力、適応力は男性の方が弱いことからくる自然の摂理と考えられる。
- ・ 性比は、古くは 20 歳代半ば～後半に 100 になり、その後は男性の方が少なくなっていた。
- ・ 戦争中等特殊な状況下では、男性が一層不足する社会になる。民力や経済力がない時ほど性差による生命力、適応力の違いが顕著に出てくるため、性比が 100 になる時期も早くなる。
- ・ 戦後は男性の死亡率が低下し、40 歳になっても性比が 100 を超えるようになった。このことと晩婚化との関係についてはほとんど分析されていない。
- ・ 性比が 100 となる年齢は、1985 年には 40 歳であったが、1995~97 年には 50 歳に上昇した。
- ・ このような状況下では、適齢期に男性の数が多いことになり、未婚・晩婚化に影響しているといえる。更に女性の高学歴化が進んだことにより、女性の男性を見る目も厳しくなっている。性比で男性が不利である上に、女性側の「まだ良い人がいるのではないか」という思いが重なり、マッチングの幅が狭くなっている。
- ・ 「結婚しなくては・・・」と「結婚しなくても・・・」の分岐点は、男性の能力と魅力により決まる。男性に厳しい時代といえる。
- ・ 結婚・出産・子育てへのインセンティブが低下していることは、重く受け止めるべきである。
- ・ 少子化の背景には、計量的に図れない側面がある。

2. 影響力を強める「子どもを生み育てること」への負のファクター

- ・ 古くから、外国人の見た日本は、情緒的で子どもに優しい国と言われていたが、現代の日本は、子どもを生み育てることに冷淡であり、子育てがしにくい社会になってきている。これは人間に向けるまなざしの変化によるところが大きい。
- ・ 今の日本は、子どもの泣き声を騒音と受け止めたり、子ども関係の施設を近所に建設することに反対する人もいる社会であり、このことも少子化と関係していると考えられる。
- ・ 人間として当たり前のぬくもりのある人との関係をつくることを面倒だと考えるようになった。とりわけ、異性と正面から向き合うことを厭う人が多くなった。
- ・ 「人」として生まれ、「人」として生きる能力と魅力の原点を軽視、等閑視している。心豊かな人間的相互作用の経験が少ない。
- ・ このような点が、他の出生率低下国と背景が異なる。

II. 人生における二つの家族

1. 家庭・家族の機能の変化

- ・ 家族の機能が「扶養」から「情愛」に変化している。結婚は、「扶養」すること、されることよりも、人間のかかわり、心理的きずなを重視するようになってきている。
- ・ 見合い結婚が減り、恋愛結婚が増加していることも、夫が妻を扶養するということから、「結婚は愛」という考えが定着していることを示している。「あなたと一緒にいたい」という意識が結婚の基礎にあると、一方で、それが崩れた途端に離婚につながってしまう。
- ・ 親だから、子だから」という意識が少なくなり、「血縁」から「絆」に重点を置くようになった。母親との絆に比べ、父親が心理的に不在となり、父性が不足しがちなことも特徴的である。
- ・ 子どもを産むということ以外の全てが、「内事」から「外事化」する傾向にある。家事、育児でも「外事化」が進んでいる。「外事化」が良いか悪いかではなく、必然的に「外事化」が進んでいることに注目すべきである。

2. 生殖 (procreation) 家族と定位 (orientation) 家族

- ・ 「家族」という概念は、近代に生まれ、現代において非常に用いられることが多くなった。
- ・ 生殖家族とは、子どもを産み、育てるという面からみる家族、定位家族とは、親からしつけや教育を受けるという面からみる家族のことである。
- ・ 人は生まれると、子どもとして定位家族の中で育ち、やがて結婚して生殖家族を持つ。
- ・ これは当然のことであったが、最近では人生を定位家族だけで終わる人も出て来たり、人生におけるこの二つの家族が揺らいでいる。

3. 出産・育児に関する二つの家族の揺らぎ

- ・ 未婚、晩婚化は生殖家族の揺らぎの一つである。また、セックスレスにより夫婦の出生

力が低下しているともいわれるようになった。

- ・ 定位家族も揺らいでいる。複相的育児（多世代家族や多様な階層関係、近隣関係の中で両親、特に母親に限らない拡大的で多面的な育児）から、単相的育児（縮小した階層関係、希薄化した近隣関係、次第に強まる核家族化の中でもたらされる両親、特に母親による限定的で一面的な育児）へ変容している。
- ・ 20世紀は、「母親が子どもを育てるもの」という考え方が大勢を占める時代であった。かつては複相的育児が前提であったため、母親が子どもを育てるとはいえ、実際には母親に限らない拡大的で多面的な育児が行われていたが、現代では単相的育児に移行し、実際に母親のみで子どもを育てざるを得なくなっており、複相的育児のメリットが見過ごされやすい。
- ・ 悠久の子育ての歴史をみると、親とともに地域や社会が子どもを育てるといいういわゆる社会的親の意識があった。現在は、社会的親が子育ての歴史の舞台から影をひそめ、人間としての成長プロセスでモデルとなる人の存在が欠落しがちとなった。
- ・ 実の母親だけに育てられることはプラスではない。社会的親が重要である。

III. 子どもを育てること、子どもが育つことへの心理的壁

1. すすむ育児の単相化

- ・ 子育てに欠かせない多様なモデリング対象との接触が減少している。バランスのとれた人間関係を育てるには「社会的親」が必要であるにもかかわらず、あまりにも母親の影響や母性的側面が強い中で育ってしまう。これがその後の未婚、晩婚にも影響している。
- ・ 子どもを産み育てる上で欠かせない親準備性、子育て準備性を親、社会が提供できていない。
- ・ 母性、父性をバランスよく成長させることは、人間としての能力と魅力に欠かせない。しかし現代の子育て環境は、母性に傾いている。

2. のしかかる母性神話、三歳児神話

- ・ 育児の単相化と性別役割分業の固定化が進んでいる。
- ・ 三歳児神話は、産業革命以降父親は仕事に専心するもの、という考えが根付いたことにより生まれた。周囲に子どもを育てる人が母親しかおらず、母親の負担が重くなった。
- ・ 「母親の責任」というプレッシャーが強いのにもかかわらず、それを支援するものがない。母親の就労、0歳児保育への否定的な感情がある。母親はもちろん重要だが、母親をサポートし、包み込む土壌がないために母親の負担が過大になっている。実の親だけでなく、それを包み込み、子どもの育ちに関わる社会的親が必要であるという意味で、母性神話、三歳児神話を脱却すべきである。
- ・ Maternal Care（母性的養育）と実の母親の養育が混在している状況を変える必要がある。母性的養育を行うのは母親に限らない。

3 . 母性、父性のアンバランス

- ・ 子どもは、「私にとって最も大切な人、自分を信頼し、見守ってくれる存在」と受けとめてくれる心理的親を求めている。
- ・ 心理的親を獲得できない子どもは、将来的には配偶者ともうまく関係を築けず、心理的自立もしにくい。
- ・ 母親養育の過剰性は、子育て競争、現代型児童虐待の一因となる。
- ・ 父親養育の不全性は、子どもの父親からの影響力を限定させ、父親の心理的不在が引きこもり、自立へのモラトリアムなどと結びつきやすい。

4 . 内に籠もる<育ち>、<自立>のエネルギー

- ・ 不登校、引きこもり、NEETの背景には、「私捜し」をし、自立を模索する青少年の姿が重なる。
- ・ 人は、三つの安全基地を築くと考えられる。第一の安全基地は特定の人物、多くの場合は母親など愛着の対象となる中核的養育者である。第二の安全基地は、子どもが育てられ、育つ中でかわりを持つ特定の人物、とくに自分を受容し肯定してくれる人物である。そして、第三の安全基地は、自分自身である。自尊感情や自己確信を持てる自分である。
- ・ 現代の子育ち環境においては、この三つの安全基地を形成できないと、生命のエネルギー、潜在的パワーが沈潜しがちとなる。エネルギーを内にこめたまましていると、ぬくもりのある人間関係、異性関係を避ける傾向が強くなる。
- ・ 人間としての能力、魅力への関心の薄さと、結婚、出産、子育てへのモチベーションの低さとの関係は否定できない。

IV . 人間としての能力と魅力を育む

- ・ 人は生まれてくると、視覚的協応(見つめあう関係)、聴覚的協応(聴き取りあう関係)、触覚的關係(触れあう関係)という三つの感覚的協応を求める。これらを通して、「育ち」と「育てられ」が行われる。
- ・ この三つを経験し、本当に愛される経験を積むほど、人とかわる能力が育ち、早い時期から自立する。これは甘やかすこととは異なる。
- ・ 思春期以降の異性とのかわりにも、安全基地の形成とともに感覚的協応が影響している。
- ・ 先にふれた心理的親が重要な意義を持つ。これは実の親に限らない。心理的親の存在は将来の結婚、出産、子育てへのモチベーションとも関係する。

V . 子育て支援、次世代育成支援の意義

- ・ 子育ては、実親の第一次的責任と、社会の養育責任の両方で担うべきである。母親がいればよい、母親が育てていればよいという考えは適切ではない。そうした考えが母親にプレッシャーをかけ、孤立させ、不安を増幅させる。

- ・ 子どもは、実の親に限らず魅力のある大人が好きであり、そうした大人を心理的親、社会的親として求める。
- ・ 児童福祉法第1条では、子どもは社会全体で育てるもの、という理念が謳われている。1947年にできた法律にそのようなことが書かれていたのは先駆的である。
- ・ 児童福祉法は、第1条、第2条を除くと、「児童保護法」であるといえるが、今こそ第1条、第2条の理念が生かされる時代である。
- ・ 少子化対策として、子どもを増やすべきという考えには疑問がある。それを下手にPRするとかえって若者の反発を招く。
- ・ 社会の子ども観を形成し、子育て支援（消極的子育て参加）から次世代育成支援（積極的子育て参画）へと移行すべきである。
- ・ 子どもを生き育てることへの価値観を形成し、子育て家庭への感謝の気持ちを育むことが重要である。
- ・ 男性の生き方、働き方への見直しは抵抗が強いが、それに躊躇することなく、意識改革というよりもむしろ行動改革をしなければならない。男性の生き方、人間観、子ども観の見直しに、男性が関心を高める必要がある。
- ・ 子どもの時期から、子どもを生き育てることの深い意義や価値を学び、その意識を育むことが必要である。近年、子どもの時期から「赤ちゃんに触れあう試み」が、保育、教育の現場で取り組まれ、成果を上げつつある。
- ・ 育休が女性のプレッシャーになっている側面がある。育休を申し出ることのマイナス面が強い。社会が、事業主、雇用者に育休を義務付けるような環境にする必要がある。